

第 22 回「石橋湛山記念 早稲田ジャーナリズム大賞」贈呈式 田中総長挨拶

皆さまこんばんは。本日はご多忙のところ、また寒い中、こちら早稲田大学大隈講堂までご参集くださり、ありがとうございます。本日、第 22 回「石橋湛山記念 早稲田ジャーナリズム大賞」贈呈式にご出席くださいましたこと、心より御礼申し上げます。

既にお気付きのことと思いますが、奇しくも本日は 12 月 8 日、81 年前に日本が太平洋戦争の開戦を選択した日にあたります。校歌に「大なる使命を 担ひて立てる われらが行く手は 窮り知らず」と謳った早稲田を与る者として、その使命に改めて思いを致しているところでございます。

さて、本賞は 2000 年に創設され、2001 年に第 1 回の贈呈式を開催しました。回を重ねるにつれて、賞の社会的評価は高まりつつあります。また、2022 年度は 134 件のご応募・ご推薦をいただくことができました。その中から今年度は、2 部門 2 作品の大賞と 2 部門 3 作品の奨励賞を選出させていただきました。早稲田大学を代表して、受賞者の皆様に、心よりお祝いを申し上げるとともに、選考委員へも御礼申し上げます。

また、新型コロナウイルス感染症の社会的状況も未だにままならず行動が制限も続いているなかで、このような賞を受賞されるような活動をされ受賞者の皆様、そしてご評価・ご選考いただいた選考委員の皆様方にも、心より敬意を表します。

さて、本賞にその名を冠している石橋湛山・元総理は、ジャーナリストとして長く活躍した後、政界に転じ、本学出身者として初めて内閣総理大臣になった方でございます。湛山はジャーナリストとして、また政治家として理想を見失わず、多様で複雑な現実から目を逸らさず、そしてまた時勢に右顧左眄（うこさべん）することなく、自らの主義・主張を堂々と貫き通しました。このことは、早稲田大学の創立者であります大隈重信とも共通していると考えております。よく早稲田は「在野精神」のことをいわれますが、この「在野精神」とは、単に野党としてなにか物を言うということではなく、どのような立場にあっても、時の政権や権力におもねらないということであると思います。明治 14 年の政変で閣外へ追い出された大隈重信も同様でありました。自分の信念に沿って判断し行動するという「在野精神」が、石橋湛山にも、まっすぐに伝えられていたと存じています。

私は総長に就任し 4 年が経ちますが、学生に対してこの間に申してきたことは、人類が直面している正解のない、もしくは答えが 1 つではない問題に対し果敢に挑戦できるような『たくましい知性』と、異なる国籍や性別、信条、価値観、言語、宗教、文化などが異なる方々の多様性を尊重し受け入れ、理解する『しなやかな感性』を育んでもらいたいと言っております。そのような学生を育てたいと思っておりますが、このような改革の中で、やはり石橋湛山氏は、まさにその二つを兼ね備えた、われわれの模範とすべき人物であると存じております。

その精神を受け継ぐべく、今回の授賞作はいずれも、日々生起する膨大な出来事の中から発掘された歴史的事実を丹念に掘り下げ、権力による隠蔽や捏造、あるいは恣意的な操作を排除し、決して忘れられない事件や問題を訴えた調査報道でございます。その手法も、ジャーナリズムの新たな可能性を示唆しているように感じられます。後程、山根 基世（やまね もとよ）委員から今回の選考全体についてご講評いただきます。

わたくしも政治学を学ぶ者として、ミャンマーの軍による国民に対する弾圧については大変な怒りを感じ、またロシアによるウクライナへの侵略についても心が張り裂けるような気持ちで見えています。大事なことは、自由民主主義という、機会の平等と言論の自由が守られることが非常に重要であるということに身を染みて感じております。その根底を貫いている作品ばかりが毎年選出されていることは大変うれしいことであり、この賞が評価されていることも大変ありがたいことでもあります。

さらに本学では、2002年から「石橋湛山記念 早稲田ジャーナリズム大賞記念講座」を開講しております。毎年、受賞者の方々をゲスト講師に迎え、学生たちに取材や報道現場の生の声を伝えていただいています。この講座は、ジャーナリストを志す学生たちにとって大変意義深いものであり、ジャーナリズムの本質や役割を深く考えるとともに将来への希望を与えていただく貴重な機会となっております。ジャーナリズムを学ぶ学生に教えられることは、単に事実のみではなく、報道する魂やその姿勢が重要であるだろうと思います。その教育を早稲田大学で行えることは、大変ありがたいことでもあります。同時に、私どもはその成果を受講生のみならず、広く世に問いたいと考え、著作としてまとめる作業を続けています。

最後に、重ねて受賞者の皆様のご研鑽とご苦勞に最大限の敬意を払いますとともに、この受賞がさらなる飛躍の契機となることを心から願っています。本日は、誠におめでとうございます。